HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	能動的な行為生成に関する考察 ：“やりたいこと”として行為するということはどういうことか
著者	佐藤，大輔; Satoh，Daisuke
引用	北海学園大学経営論集，16(3)：31-41
発行日	2018-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

能動的な行為生成に関する考察

―“やりたいこと”として行為するということはどういうことか―

佐　藤　大　輔

概　　要

私たちが“やりたいこと”として能動的に行為するということはどういうことだろうか。本稿では，議論の基点として行為が少なくとも理論（“やろうとすること”）と技能（“できること”）の併存によって生成されるという前提を置き，そこから能動性が生み出される用件についての議論を試みる。まず，行為の背景にある理論と技能がそれぞれどのようにして当事者に理解されているのかが明らかにされる。その上で，理論の理解にはいわば“やりたいこと”と“やるべきこと”としての形があり，このうち，“やりたいこと”としての理論を持つことこそが行為の能動性に寄与する可能性が指摘される。さらに，“やるべきこと”も理論のすり替えによって行為生成につながる可能性があることに言及した上で，どうすれば受動的な“やるべきこと”としての理論を能動的な“やりたいこと”としての理論へと移行させていくことができるのかについても考察を行う。

は じ め に

行為が生み出されることとは何か

ある行為が生み出されるとき，私たちはなぜその行為をするようになるのだろうか。あることがなされるということは，少なくともそのことが“やろうとすること”として思いつかれていることを意味している。また，そのことが実際的な動作や行為に結び付けられているということは，身体がそのやろうとすることに対応できる能力，すなわち“できること”を持っていることを意味している。つまり，冒頭の問いには，他でもないその行為がなされるのはなぜか，という精神的な理由に関する問いと，それが行為として生み出されることが可能なのはなぜか，という身体的な理由に関する問いが含まれていると考えられるのである。

私たちがなす行為は，一度経験されており，すでにできるようになっていることを再現していることが多い。文書を作成するためにキーボードを使ってコンピュータ上に文字を打つことも，盛り上がらないパーティーに一石を投じようとピアノを演奏することも，すでに身体的に習得された技能を，（特定の問題に対する解決策として）精神的に考えられた理論に基づいて発揮している例である。つまり，このときそれらの行為が生じるのは，少なくとも実現しようとすることに関する理屈としての理論（やろうとすること）があることと，それを実現するための技能（できること）があることに依拠していると考えられるのである。やろうとすることができるからこそ行為が生じるのであって，やろうと思っているだけでも，ただできることがあるだけでも，行為が生じることはない。いわば，ある人が行為を生成しようとすることとは，そ

【図 1】行為生成の用件

の人がその行為に関する理論と技能を併せ持っているということなのである。

本稿のもくろみ

本稿では，このように“やろうとすること”としての理論と，“できること”としての技能の併存が，行為を生み出すための条件となっているという仮定をまず置いてみることにしたい。その上で，どのようにして行為が能動的に生み出される可能性があるのかについて，そこから論じてみようと思うのである。もちろん，そもそもこれら 2 つだけが行為を生み出す条件といえるのかについては，基礎的な議論の積み上げが必要である。しかしながら，行為を生み出すための最低条件と考えられるこの 2 つがどのように満たされるのか，そのような条件の満たし方が行為に関する態度としての能動性や受動性とどのような関係を持っているのか，を検討することにはひとまず現実的な意義があるといっていいだろう。

能動性や受動性というような行為を生み出す際の態度は，ビジネスや教育の現場などにおいて多くの人々が関心を持つ課題の 1 つである。少なくともそれが組織や仕事の合理性に影響を与えるだけでなく，創造性にも影響を及ぼす可能性があると考えられているからである。それにも関わらず，そのような態度に関する方略が実践家によって経験的に語られたり実行されたりすることはあっても，彼らによって理論的な解決方法が探求されることは少ない。その結果，現場では既存の管理を徹底することによってこのような問題を解決しようという傾向すらみられ，それが能動性や創造性に対する逆機能を生み出しているようにも思われるのである。このような問題の根本的な原因の 1 つには，人々の行為に対する態度を議論するための，現実に即した基本的枠組みが提供されていないことが挙げられる。そこで本稿では，日常的に行為の前提だと考えられている理論と技能の併存という枠組みをひとまずの基点として置き，そこからどのように能動性を実現することができるのかを仮説的に考えることにしてみたい。このような形で議論を始めることによって，この枠組みが持つ既存の知見や概念などとの関わりを明らかにしつつ，その妥当性を検討することも可能になると考えられる。そして，このような議論が行われることによって，ビジネスや教育の現場における実践家の人々に対して新しい実践的知見を提供することを目論むものである。

1　行為の背景にある理解

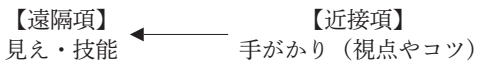
そもそも，“やろうとすること”としての理論や“できること”としての技能を持つということは，ただそれらを（他人事的に）知っているということではない。当事者としてその理論が納得されていなければ，やろうとしているというのには不十分だし，その技能がいつでも再現できるように習得されていなければ，できることとは呼ぶことができない。つまり，理論や技能が自分のものになっているという意味で理解されていなければ，やろうとしているとか，できるとかというような状況にはあたらないのである。それゆえ，特定の行為について精神的にも身体的にも理解しているという，複合的な理解がなされてい

ることこそが行為を生じさせるための条件だと考えることができる。では，理論や技能を当事者として持つようになる理解とは一体どのようなものなのだろうか。

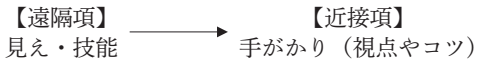
ふつう，私たちが何かを理解しているというとき，それは理屈を知っているだけでも，何かを実感しているだけでもない，納得的な状況を指しているように思われる。これについてポランニーは，理解が包括的存在を把握するという取り組みであり，それは暗黙知としての構造を持つものだと説明している（Polanyi, 1966）。彼は暗黙知の構造を以下のような4つの側面から捉え，その特徴を説明している。

- ●機能的側面…私たちは包括的存在（対象や技能）を把握するとき，近接項から遠隔項へと注目しているので，近接項について明確に語ることができない。
- ●現象的側面…近接項は遠隔項との関連（遠位項の中）において感知されるのであって，一般に近接項のみで感知されることはない。
- ●意味論的側面…近接項から遠位項へと注目することによって近接項が意味を持ち，私たちはその意味に注目している。
- ●存在論的側面…暗黙知とは近接項と遠隔項との間にうちたてられる関係性として把握される包括的な存在を理解することである。

このような説明に基づけば，暗黙知には少なくとも2つの構造が含まれていることになる。すなわち，近接項から遠隔項へと向かって対象が把握される構造と，遠隔項から近接項へと向かって対象が感知される構造である。前者には実体的な対象についての見え[1]を生成したり，動作的な対象としての特定の技能[2]ができるようになることが挙げられる。一方で，後者にはその見えを生成するような視点[3]を知る（気づく）ことや，できるようになるためのコツ[4]を知る（気づく）ことのように，いわば手がかりを得ることが挙げられる。つまり，理解することとは，何かが見えたりできたりする（近接項から遠隔項）だけでなく，同時にそのように見えたりできたりする原因としての手がかりに気づき，それを知っている（遠隔項から近接項）ということを意味するのである。このことは，遠隔項に置かれるものがなぜそう見える・できるのかを問うことをつうじて，その仮説としての手がかりを近接項に見つけることが理解には必要なことを意味している。私たちが何かをたまたま一度できるようになったり見えるようになっただけで納得的に分かったとは思えないのは，このような近接項の発見が，理解には必要であることに依拠しているものと思われる。いわゆる包括的な理解とは，このような2つの構造が併せ持たれることによって実現されるものだと考えることができるのである。



【図2】見えること・できること



【図3】知る（気づく）こと

2　日常の理論としての“やりたいこと”

以上の議論で，行為生成の背景には理解された理論と技能の併存がありそうだということが明らかになってきた。しかしながら，この理論と技能が理解されていれば能動的に行為が生じる，というのには若干の説明不足があるように思われる。たとえば，やろうとはしているものの，自分が個人的にやりたいわけではないということがあるかもしれない。

これは，いわば“やるべきこと”をやるべきだから行為しているというものであり，私たちは通常このように行為することが少なくない。学校や会社などで課される勉強や仕事などとしてのタスクは，それ自体個人的に“やりたいこと”として理解されているというよりは，社会や組織などのために“やるべきこと”として理解されているように思われるのである。では，能動性と密接な関係があると考えられる“やりたいこと”としての理論は，どのようにして人々に持たれるようになるのだろうか。

そもそも“やりたいこと”も“やるべきこと”も，やろうとしているという意味ではいずれも行為の当事者にとって理解された理論である。ところが，特に“やりたいこと”については，それを「理論」として表現するのにはいささか違和感があるかもしれない。つまり，理論という形式ばった表現には“やるべきこと”というニュアンスが伴われており，“やりたいこと”はこれとは別にもっとより個人的であいまいな思い付きのようなものではないかという感覚である。

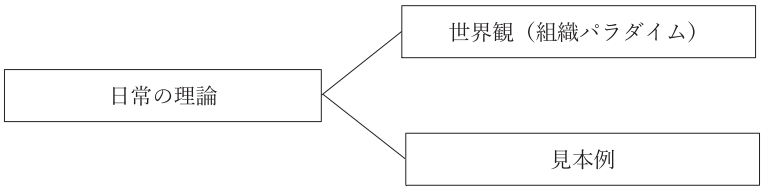
これについて，加護野は組織の中の人々がなす行為の背景には彼らによって理解された日常の理論があり，彼らによってどのような行為がなされるのかは，この日常の理論によるものだと説明している（加護野，1988）。実践者である彼らが持つ行為に関する考えとしての日常の理論は，科学者などが扱う一般理論に比べて方法論上の厳密性については劣るものの，それが当事者的に理解されているという意味では十分に理論と呼ぶことのできるものである。一般理論は特に外的な妥当性を厳密に担保することから広く社会一般に応用可能で，それゆえ多くの人々に理解されるよう作られている。私たちの社会生活は，少なからずこのような一般理論に基づく行為によって作り出されていると考えられるのである。しかしながら，このような一般理論に基づいて行為するとき，その行為の当事者がしている理解は，日常生活者としての理解ではなく社会構成者としての理解である。つまり，その当事者の日常生活とは別に，社会生活上いわば“やるべきこと”が理解され，行為されているのである。

一方で，日常の理論は一般理論が持つような妥当性担保のための厳密性を持たないかもしれないが，日常生活の当事者としてリアルに理解されており，実際にそれに基づく行為がなされるという意味で十分に理論の役割を演じているということができる。しかも，この日常の理論は当事者として日常的に（いわばリアルに）理解されているという意味では，一般理論よりも力強く人々の行為に影響を及ぼしている可能性がある。このことは，一般に（社会構成者として）“やるべきこと”よりも，（日常生活者としてリアルに）“やりたいこと”の方が行為を生み出す力が強いニュアンスを持つことからもうかがうことができる。

3　“やりたいこと”をつくり出す

これまでの議論で，理解における視点の違いが“やるべきこと”と“やりたいこと”の違いを生み出している可能性を指摘してきた。では，“やりたいこと”としての理解とはどのようにして実現されるのだろうか。加護野によれば，日常の理論が当事者に理解されるということは，彼らに世界観と見本例という 2 つのアンカーが降ろされることを意味するという。世界観は組織で共有される価値としてのパラダイムであり，それは日常の理論を正当化し，支える。一方で，見本例は武勇伝や物語などとして表現されるものであり，いわば証拠や根拠として理論の妥当性を担保し，支える。

加護野は組織変革が人々の（能動的な）行為の変化を伴う点に注目し，そのためには彼らが持つ日常の理論を変えていく必要がある



【図４】日常の理論を支える２つのアンカー（加護野，1988）

とした。管理者が行為者の能動性を実現するということは，管理者がさせたい行為を，行為者が日常の理論として理解しなければならない。ところが，行為者はそれとは別の日常の理論を持っていることが普通で，これをいったん破壊したうえで，新しい日常の理論を受け入れてもらう必要がある。そこで示されるのが，矛盾の創造と増幅，見本例としてのパラダイムの創造，およびパラダイムの伝播と定着という複数フェーズによる組織的な理解の仕組みである。

矛盾の創造と増幅は，いわばドミナントコアリション（支配的連合）の人々による戦略的選択（Child, 1972）による環境の認知と恣意的な選択の実施を指す。トップが環境の変化を察知し，組織変革の先鞭をつけるわけである。しかしながら，トップによる戦略的選択が行われたとしても，組織の中の人々の認識がそれに合わせて自然に変わっていくわけではない。そこで，小さな成功事例を生み出すなどして最初の見本例を創り出し，同時にその見本例が指し示すパラダイムを創造する。このようにして生み出されたパラダイムは，見本例による成果の制度化などをつうじて組織内に広げられていき，人々に定着していく。これらの結果として２つのアンカーが個人レベルで変化していくことにより，新しい日常の理論が理解されていくのである。

このような組織変革の過程では，見本例と組織パラダイムは互いに関連付けられて組織に広がっていく。見本例が新しい組織パラダイムへの注目を促しつつ，両者が人々に受け入れられていくのである。ここで，このことが暗黙知と同様の構造を持っていると考えることはできないだろうか。暗黙知は手がかりとしての近接項から見えや技能としての遠隔項を把握する構造と，その遠隔項から手がかりとしての近接項を感知するようになる構造を有していた。手がかりとしての見本例から遠隔項としての世界観（組織パラダイム）が把握されるようになり，そのようにして把握された世界観によって手がかりとしての見本例が感知される。このように，組織の中の人々が日常の理論を支える２つのアンカーを変えていくのには，両者が関連付けられつつ受け入れられていくことが重要だったと考えてみたいのである。２つのアンカーはそれぞれ別に提供されるのではなく，両者が関連付けられながら与えられることによって人々によって理解がなされていくとみることができる。このようなことから，組織における人々の行為と，その背景にある日常の理論を変えることで“やりたいこと”を持つように促すということは，２つのアンカーによる理解を実現しながら包括的存在としての理論を把握していくことによって実現するものだと考えることができるのである[5]。

4　統合的な理解

１つの行為について精神的・身体的な理解が併せ持たれているということは，いわば“やろうとすること”ができる，または，“できること”をやろうとしているということで

ある。このことは，１つの行為について２つの理解が関連づけられていること，すなわち統合的な理解がなされていることこそが，行為生成の条件になることを意味している。ところが，精神的な理論と身体的な技能は，自然発生的に関連づけられつつ理解されるわけではない。例えば，できるようになっていることがあったとしても，それだけでそれをやりたいと思うわけではないし，同様に，やりたいと思うことができることだとは限らない。むしろ，できるようになっていることは，できるのだからもうやらなくてよいという思考（それをやりたくないという仮説）すら生み出すし，何かをやってみたいと思うとき，それはその何かができないということを示唆しているものである。例えば，ピアノを弾くことができるようになっているのであれば，あえてことさらにピアノを弾く（練習する）必要はなくなるだろう。ピアノを弾いてみたいと思うのは，むしろそれができないからである。

では，できるようになっているにもかかわらず，それをあえてやりたいと考えるのはなぜだろうか。また，できないからこそやってみたいと思うときに，どうやってできないことをできるようにすることができるのだろうか。例えば，パーティーで場を盛り上げようと司会役を買って出たものの，なかなか思うように盛り上げを演出できないでいるとき，会場に（自分が演奏することのできる）ピアノがたまたま置いてあることに気がついたらどうするだろうか。自分が弾けるクラシックの曲では，ピアノを演奏したとしても必ず場が盛り上がるというわけにはいかないかもしれない。しかし，それはパーティーの雰囲気を良くし，満足感を高める一助にはなりそうである。この時，当初の場を盛り上げようとする理論（意図や前提）を再構築し，雰囲気や満足感を高めることへとそれを変更することになるが，結果として，ピアノの演奏によって当初思ってもみなかった贅沢な雰囲気のパーティーが実現するかもしれない。

このように理論の再構築を伴う行為の生成を支えるのは，意図せざる結果と既存の技能である。意図せざる結果は理論の再構築を促す契機となり，既存の技能は再構築される理論に影響を与える。特に，既存の技能については，それに合わせるようにして前提が再構築されるのであって，理論と技能が偶然関連付けられるわけではない。ピアノがあった（と同時にそれを自分が演奏する技能を持っている）からこそ，場の盛り上がりを目指す理論が，ピアノの演奏によって可能となる雰囲気の向上を目指す理論へと変化したのであり，それは偶然そうなったわけではない。つまり，既存の技能としての“できること”（ピアノを弾けること）が新しい理論としての“やりたいこと”（場の雰囲気を高めるためにピアノを演奏すること）に影響する形で両者は関連付けられているのである。

このように考えると，すでにできるようになっていること（既存の技能）は，そのまま“やろうとすること”（理論）として行為を引き起こすのには十分ではない。しかし，やりたいことを生み出し，行為を生じさせるためには必要な条件だということができそうである。また，技能として習得されていないこと（できないこと）を，それだけの理由で行為しようとすることは難しいが，その前提となる意図を実現するために自分のできることが貢献すると認識されること（自分の既存の技能と未知の技能とを関連づける理論が発見されること）によって行為がなされることはありそうである。

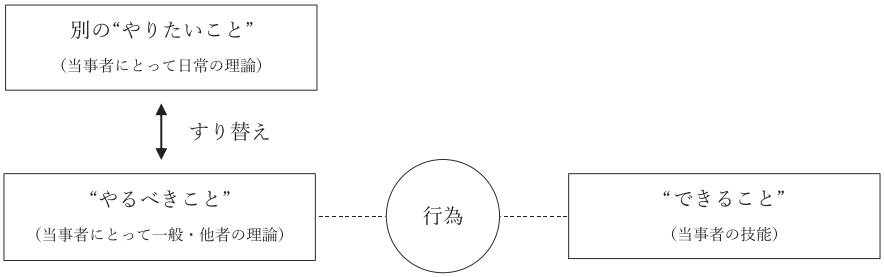
これらのことから，われわれは行為が生じるメカニズムについて１つの想定を持つことができる。最初に，“できること”（技能）が発見され，そこから“やりたいこと”（理論）が認識される。例えば，自分が演奏できるピアノの存在（“できること”）を発見し，これ

なら場の雰囲気を高められそう（“やりたいこと”）だと気づく。しかしながら，これだけでは唐突にピアノを演奏することになり，行為としての正当性を欠くことになってしまう。そこで，これらの“できること”と“やりたいこと”を念頭に，相対的に現状で（理論的に）やろうとして失敗していることが顕在化される（それは失敗を探る目で見ることによって事後的につくられている可能性もあるが)。司会という行為によって当初場を盛り上げようとした目論見は失敗したとして，偶発的に思いついた（ことではあるが既存の技能である）ピアノの演奏に焦点が当てられる。そしてそれによって実現される場の雰囲気を高めるという新しい理論に基づき，ピアノを演奏するという行為が生み出される。司会からピアノの演奏へと行為は変わるが，雰囲気を贅沢なものに高めることは，当初想定していた場を盛り上げることを包含している（またはそれと重複している）などとして正当化されるわけである。

5　理論のすり替えによる受動的な行為生成

次に，他者から与えられた理論（他者の“やりたいこと”，当事者にとっては“やるべきこと”）に基づいて，既存の自分の技能を行使することを考えてみてほしい。その時，自分にとって（日常の理論として）の“やりたいこと”は持たれていないため，“できること”をできるように行為するだけである。この時，他者から与えられた理論はただ“やるべきこと”として日常的には理解されていないものだが，それとは別に用意されたもう1つの日常の理論が理解されることによって，人工的に仕組まれた行為が生じることになる。例えば，自分とは無関係の他人のパーティーで，報酬と引き換えにピアノを演奏するのは，その報酬が実現する（パーティーとは無関係の）自分の日常生活での“やりたいこと”（たとえば，生活必需品の購入）がパーティーでピアノを披露することとすり替えられているからである。当事者にとって“やりたいこと”は生活必需品の購入であるが，それを実現する報酬がパーティーでのピアノの演奏によって得られるために，いわばすり替えられた理論に基づき行為が実現されているのである。このように，他者の理論が行為の当事者にとってどのような意味を持つのかという別の理論を用意することによって，他者の（または一般の）理論としての“やるべきこと”を行為することがありうるのである。

このような日常の理論と一般（他者の）理論とのすり替えによる行為は，行為そのものを生じさせる方法として私たちがよく用いるものではある。しかしながら，行為そのものが引き起こす（他者が期待する）結果と，行為するということが引き起こす（行為の当事者としての自分が期待する）結果は異なるも



【図5】理論のすり替えに基づく行為生成

のになる。行為そのものが引き起こす結果は，他者によって期待されたもので，当事者としてはそもそも興味のないものである。同時に，行為するということが引き起こす結果は，自分が期待した（例えば）報酬の獲得をもたらす。当事者として，得られた結果に基づく次の行為は報酬に関連付けられて生じることになるため，報酬を伴う他者の理論が提供され続けなければ行為が継続することはない。その結果，自分だけでは行為を自律的に生じさせることのない，受動的な態度が生み出されることになるのである。

6　演じることによる視点の移行

それでもなお，私たちは常に“やりたいこと”に基づく能動的な行為だけをしているわけではない。一般に，社会生活の中で他者に与えられたり，自分で課したりする“やるべきこと”を発端に行為を生み出そうとすることはよくあるように思われる。このようにすり替えの理解が発端だったとしても，能動的な行為を生み出すようになるケースにはどのようなメカニズムが潜んでいるのだろうか。

もし，（他者から，または一般に）“やるべきこと”が与えられたとき，それが報酬の獲得以外に自分にとっての“やりたいこと”としての意味が模索されたらどうだろうか。この時，行為者は“やるべきこと”をただやるべきだとして行為してしまうのではなく，なぜその行為を自分がしたいと思える可能性があるのかを考え，自らの技能と関連づけて行為を生じさせる。いわば，他人事の理論を当事者化する（リアルに当事者になってみる）取り組みをつうじて，そこから生み出される行為とその結果を自分のものとすることにより，次の行為を能動的に生じさせるようになる可能性である。

例えば，ピアノを初めて習い始めた子どもがご褒美を目的に練習に取り組む場合を考えてみよう。「ご褒美が欲しい」というすり替えの理論（当事者にとって“やりたいこと”）によって生み出される練習という行為（当事者にとっては“やるべきこと”としての，他者の“やりたいこと”に基づく行為）は，練習のたびにご褒美が用意されない限り生み出されることはない。ところが，ご褒美目的でなされる行為（練習）のなかでピアノ演奏の楽しさに気づき，一曲を演奏しきりたいと思うようになることで理論の当事者化（“やるべきこと”が“やりたいこと”になること）がなされることがある。そうなると，次からはご褒美が与えられなくとも練習したいと思うようになり，能動的に行為を生じさせるかもしれない。当事者である子どもにとって，当初のご褒美は最初の行為を生み出し，少なくとも身体的には当事者としてふるまうきっかけになる。そのようにいわば演じている当事者になりきることによって，自分がなしている行為の意味を理解し，当事者としての理論（“やりたいこと”）を創り出すわけである。

このように，単に表面的に演じるだけの表層演技に対して，自分自身が演じる対象になりきるような演じ方は，深層演技とも呼ぶことができるものである（Hochschild，1983）。本稿のこれまでの議論に基づけば，表層演技は与えられた視点に立ってみることをつうじて，特定の見えを見出そうとする取り組みである。換言すれば，演じる対象に関する手がかり（その人がとった行動やふるまい）をもとに，彼が持つ世界観を把握しようとするのである。一方で，深層演技はそこからさらにそのような世界観を把握するような視点が，演じている自分自身のどこにありそうかを探り，場合によってはそれを自分自身の中につくり出そうとする取り組みである。このような演じ方は，演じる対象と自分とを統合することをつうじて，新しい自分（の視点）をつくっていく，または自分が変わっていくことになる。

表層的に演じるとき，私たちが演じることは“やるべきこと”としてなされる。組織構成者としてであれ，誰かの代わり（理論のすり替えによる行為生成）としてであれ，日常的な自分自身の視点とは異なるところから行為しようとすることは，受動的な態度を生み出す。しかしながら，深層的に演じるとき，私たちは表層的に演じている自分の中に，組織構成者や代わりとして行為している他者と同じ視点を探ったり，つくり出したりするようになる。これによって，“やるべきこと”が徐々に自分の“やりたいこと”として捉えられるようになっていくのである。深層的に演じることとは，このような視点の移行をつうじて，受動的な態度が能動的なものへと転換していくことを指しているということができる。

このような視点の移行こそが演じることの最も重要な側面であり，それゆえ深層演技こそが演じることの核心だということができる。そして，演じることとは誰かに見せるために行われるものではなく，自分自身が理解するための１つの方法だと考えることができるのである。

先の例で，当該の子供が受動的な姿勢にとどまらず，能動的に行為し続けることになったのは，最初の行為（ご褒美によるすり替えに基づく行為）が行われたときに，“やるべきこと”として行為を見る視点から，“やりたいこと”として行為を見る視点に転換できたからである。この時，当該の子供は自らがやらされている行為の中で，まず身体的に当事者となる（表層的に演じる）。そして，それをきっかけに精神的にも当事者として行為を見直す（深層的に演じる）ことをつうじて，当事者としての理論を構築するようになるのである。受動的な態度から能動的な態度への移行は，このような視点の転換をいかに実現するかにかかっている。そして，身体的に当事者になってみることを契機に，そのような行為を通じて得られる遠隔項（見えや技能）から近接項（手がかり）としての視点やコツを得るという，いわば演じる取り組みこそがそのきっかけになるのである。

この意味で，演じることによる行為の当事者化とは，単にやってみること以上の取り組みである。ただやってみただけでは他人事の行為をしているだけのことであるが，そこでできていることや見えていることがなぜ見えて・できているのかを問うことによって，自分なりの手がかりを発見することができるのである。そして，そのようにして発見された手がかり（近接項）をもとに次の見えや技能（遠隔項）が生み出されていく。問うことによる近接項の発見が当事者的な理解を実現し，次の行為を可能にするのである。このように自律的に行為が継続されている状況は，問うことを含む演じることによってなされるともいうことができるのである。

おわりに

本稿では行為生成に関わる態度としての能動性や受動性が，どのようにして生み出されるのかについての議論を試みた。本稿が当初置いた基本的な前提は，行為が理論と技能の併存によって生成されるというものであった。これを基点に，この両者の併存の仕方によってどのようにして能動性や受動性が生じる可能性があるのかを検討したのである。

まず指摘されたのは，能動性が“やりたいこと”としての日常の理論から生み出される可能性である。“やるべきこと”も“やりたいこと”もそれぞれ理解された理論ではあるが，前者は日常の生活者としての視点から理解されており，後者は社会構成者としての視点から理解されている。加護野が指摘するように，私たちの行為はいわば“やりたいこと”としての日常の理論に依拠しており，この意味で能動的な行為生成はこの日常の理論をどのよ

うにして持つことができるようになるかという問題ともいうことができる。それゆえ，組織パラダイム（世界観）と見本例によって構成される理解の構造を実現することで，能動的な行為生成を実現できる可能性が指摘されたのである。

一方で，“やるべきこと”としての理論に基づく場合も，理論のすり替えによって一応は行為生成を実現することにも言及した。ただし，“やるべきこと”による行為は他者によるすり替えを前提とするため，自律的に行為が繰り返される状況には至らない。そこで，“やるべきこと”が“やりたいこと”になっていくメカニズムについても説明が試みられた。ここでは，演じることをつうじて，“やるべきこと”をもつ社会構成者から“やりたいこと”をもつ日常生活者へと視点の移行が行われ，理論の当事者化が進むことによって受動的な態度から能動的な態度への変容が起こる可能性が指摘されたのである。

本稿での議論は，あくまで行為生成に関する原理的な構造の一端を説明したに過ぎない。しかしながら，行為に関する基本的な議論の枠組みを試論的にでも提供できたことは，本稿がリアルな実践に対して持つ一定の意義である。特に，このような議論の上に，どのようにして他者が行為者から能動的な行為を引き出すことができるのかが議論できるようになった点は，本稿の理論的意義の 1 つになるといえるだろう。

また，本稿で意識的に用いた“やるべきこと”や“やりたいこと”，“できること”などの表現は，実践者にとって直感的に理解しやすい一方で，それらの多義性は厳密な議論を阻害する可能性がある。それでもなお，あえて本稿がこれらのような概念から議論を始めるのには，管理者や行為者などによる日常的な実践へのインプリケーションを目論んだからである。もちろん，本稿ではこれらの日常的な概念から議論を始めながらも，それらにできるだけ厳密な定義を与えることができるよう丁寧な説明を付し，そのメカニズムを学問的に明らかにすることに配慮したつもりである。ただし，本稿の議論では既存の理論や概念との関連が明らかに不十分であることは承知しており，特に管理に関わる諸知見との関係は今後の課題としたいと考えている。

注

1　宮崎は，見えと視点の関係がポランニーのいう暗黙知の構造と同様だと指摘する（宮崎・上野，1985）。遠隔項としての見えの生成は，近接項としての視点から遠隔項としての見えが生成され，その見えに基づいて視点を把握することができるようになる。遠くに小さく島が見えるということは，その島から遠く離れたところに自分がいる（視点がある）ことを意味するのである。

2　ポランニーが包括的存在と呼ぶものには，実体的な対象だけでなく技能もが含まれる。彼は，人間の巧妙な身体の使用（つまり動作）は包括することによってのみ知ることのできる実在的な存在であり，それはその行為の対象である実在的存在と同じ構造を持っているとする。つまり，実体的な対象も動作も近接項と遠隔項との間に把握される包括的存在であるとされるのである。実体的な対象としての包括的存在を把握することで得られるのは精神的な暗黙知ともいえ，これにはスキーマなどのメンタルモデルやそれを表出化した理論があたると考えられる。一方で，動作としての包括的存在を把握することで得られるのは身体的な暗黙知といえ，これには技能などが当たるものと考えられる。

3　脚注 1 と同様。

4　脚注 2 と同様。

5　加護野による議論は，“やりたいこと”としての日常的な理解が個人的に終始する取り組みではなく，組織的な取り組みと個人的なそれによる相互作用的な関係の中でなされるものだということを示唆している。個人が手がかりとしての見本例（近位項）から組織で共有される見えとしての世界観（遠隔項）を把握し，その世界観から自分がどこから対象を見ているのかという手がかり（視点）を感知する。これら 2 つのアンカーによって支えられることによる理論の理解は，組織的なマクロレベルのものの把握と，個人的なミクロレベルのものの感知を通じて行われているということ

ができる。

このようなミクロレベルとマクロレベルの相互補完的な取り組みを通じて理解が行われるという説明は，技能の習得としての理解においても共通していると考えられる。レイヴ・ウェンガーは技能の習得としての学習が，個人同士のインプット－アウトプット関係によって行われるのではなく，コミュニティへの参加を通じて行われるとした（Lave and Wenger, 1991）。いわばコミュニティへの参加こそが学習であるという説明は，学ぶのが個人（ミクロレベル）なのかコミュニティ（マクロレベル）なのかという問いが，もはや無意味なことを示唆している。同様に，松本は技能形成を「学習者の主体的な実践共同体内外の関わり方のデザイン」として捉え，いわば共同体の地図のようなものを構築することが技能形成と深くかかわっているとした（松本，2003）。ここでも技能形成という学習，すなわち技能の理解が，コミュニティとのかかわりの中で実現されることが示されている。学びや理解はミクロとマクロの関係性の中で行われる取り組みであり，その主体は個人でもあり組織（コミュニティ）でもあると表現できるのである。

引用文献

Child, J.（1972），“Organizational Structure, Environment and Performance: the Role of Strategic Choice,” *Sociology*, 6: 2–22.

Hochschild, A.（1983）The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling, The Regents of the University of California.（石川准・室伏亜希訳（2000）『管理される心―感情が商品になるとき』世界思想社.）

加護野忠男（1988）『組織認識論』千倉書房.

Lave, J. and Wenger, E.（1991）*Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press.（佐伯胖訳（1993）『状況に埋め込まれた学習』産業図書.）

松本雄一（2003）『組織と技能―技能伝承の組織論』白桃書房.

宮崎清孝（1985）「心情の理解と視点」（宮崎清孝・上野直樹『コレクション認知科学③視点』（第7章）東京大学出版会）

Polanyi, M.（1966）*The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul.（高橋勇夫訳（2003）『暗黙知の次元』筑摩書房.）